

母の被爆体験と 二世としての私の思い

土谷 節子
帯広市

2015年8月5日、奇しくも原爆投下の前日に母は89歳で亡くなった。亡くなるまでの10年間、ALSを発症し自宅介護を続け、2年前からは認知症を患い施設などにお世話になった。「8月6日」前日に亡くなったことに何かの縁を感じ、昨年の広島での慰霊祭は遺族代表として献花させてもらった。その際、被爆二世の集まりに参加し二世の方たちの思いを知るようになった。



生前、母は被爆当時のことを寝物語のようにして娘の私に語ってくれた。母は爆心地から1.6kmにあった貯金支局に勤務しておりそこで被爆した。その時の光、爆音、爆風はいつもの爆弾と違うと感じたようだ。咄嗟に机の下に潜った。周りは一瞬にして灰色の世界に変わった。同僚と二人でコートをかぶり外へ出た。4階から階段を下りて逃げる途中、管理人の娘さんがお腹が裂けた状態で倒れていた。建物の外に出るとそこは生き地獄のようだった。ドラマや映画などテレビで放映される場面を見て、母は「こんなものじゃない」が口癖だった。この言葉は小さい頃からよく耳にしていた。

外は人の波、着ているものによって焼け方が違っていった。川縁に水を求めて沢山の人が倒れ込んでいた。朝出勤した日と同じ街とは思えなかった。

方向感覚がないまま親の元へと向かった。途中親戚のおじさんに会い「一緒に逃げよう」と言われるが逆方向の親の元へ歩いた。幸いにも親

のいる方向は火元と逆だったため母は助かった。夜に近い頃家にたどり着いた。両親は変わり果てた娘の姿に驚き、母親は泣き崩れた。白のブラウスは血に染まり、頭から背中には無数のガラスの破片が突き刺さり、皮膚ははがれ落ちていた。その時初めて自分の姿に気づいたようだ。すぐに救護班に連れて行かれ、ガラスの破片を除去してもらった。30数カ所もあった。何週間後かに皮膚が膿み、埋もれていたガラス片が出てきた。

母の背中を洗うたびこの傷跡が目に入る。私たちを育ててくれた母は、被爆について兄と弟にはほとんど話をしていない。娘の私にだけ話してくれていた。年をとると悲惨な体験を語りたくないのだろう、「嬉しい話じゃないから」と言い孫たちにも多くを語らなかつた。母の被爆体験を語り伝えられるのは娘の私だけだと思う、日々私は聞いていたから。

短大時代に私は広島を訪れた。母から聞いた話と一緒に、母の話が再現されたように感じた。語り伝えることが大事だと強く思う。去年2回目の広島訪問をしたが、若い時の感覚とはまた違った。若い時はただ共感したが、年を経た今、この平和を大切にしていかなければ駄目だと感じている。昨年はオバマ効果なのか、原爆資料館を訪れる外国人観光客が多かったようだ。現実起きたことを見たり聞いたりすることはとても大事だと思う。

ホー・チ・ミンの戦争資料館では沢山のアメリカ人が展示パネルを1枚ずつ丁寧に見ていた。かつてホー・チ・ミンで自国の人間が何をして来たのか考えながら見ているのだと思った。過去に起きたことを知ることは、未来に向けた教訓だと感じる。広島での外国人観光客の姿を見ながら、もっと沢山の日本人に来てもらいたい、見てもらいたい、感じてほしいと思った。

去年は夫と長崎の慰霊祭に行き献花させてもらった。平和を願う像を見た時、悲惨な現実を直視し続けることが必要だと思った。そして、祖母が被爆した地に行きたいという私の娘を連れて、貯金支局の跡地にある慰霊碑に献花してきた。冷たい慰霊碑に触れ、母が生き延びてくれたからこそ、今の幸せがあるのだと感謝した。

去年帯広三条高校放送局から「戦争体験を聞く会」のオファーがあり

話をさせてもらった。また、8月6日に平和の鐘をつくお寺があるが、身近な所から平和の願いを伝えられるのではないだろうか。

被爆者協会の地道な活動が、一世二世を支える礎となっている。私自身、様々な手続きを手助けしていただいた。

「オバマの言葉」では、当たり前の日常が一瞬にして失われた現実をどう受け止めていくかを最後に語っている。科学は人々がよりよく生活するためにこそ活かされるべきだと言う。

一人ひとりが思いを伝えることで広がっていく。だから自分にできることを探していきたいと私は思う。

慰霊祭の献花のことを話すと兄と弟も一緒に行き遺族代表として献花をすることになった。また、三人で母が被爆した地に行き献花をしてくる。生きている限り訴え続け、平和を未来につなげたい。

(2017/5/28 『被爆二世プラスの会北海道』設立総会での講演)